

Sea & Ship's Magazine

LAMER

2017 No.243

03-04

MAR.-APR. [隔月刊]

フェリー しもと

特集

長距離フェリーで
スローな船旅

若い力が支える海運の未来

―海技教育機構の練習帆船「日本丸」が遠洋航海へ―



登檣礼で出航の挨拶をする実習生たち

太平洋の白鳥がハワイへ向けて羽ばたいた――。

2016年12月10日午後2時、海技教育機構の練習帆船「日本丸」(2570総トン)が、実習生110名を乗せてハワイへ向けて遠洋航海に出航した。出航式には、石井啓一国土交通大臣も臨席し、激励した。「日本丸」は、ナウリウイリ(カウアイ島)、ホノルル(オアフ島)に寄港し、2017年2月8日、東京に帰港した。

快晴に恵まれた12月10日、帆船「日本丸」の後部甲板上で、出航式が行われた。実習生は、全国5つの商船系高等専門学校(富山、鳥羽、広島、弓削、大島)の4年生110名(うち女子は11名)。冬の北太平洋の荒波を超えカウアイ島ナウリウイリ、オアフ島ホノルルへの寄港をへて、2017年2月8日、東京港に帰港する。

出航式の前に、実習生が家族や友人らとしばしの別れを惜しんでいた。

大山泰知さん(広島商船高専)は香川県から駆けつけた母親の知恵さんと記念撮影に臨んだ。「これまでの訓練で自信ができました。頑張ります」と語る泰知さんに、知恵さんが顔をほころべた。

竹俣多聞さん(同)の父の正三さんも、広島商船高専の出身で「日本丸」で実習を受けた。居室は偶然、多聞さんと同じだったという。「感無量です」と正三さん。多聞さんは「身が引き締まります」と意気込みを語った。

美濃春香さん(同)は広島から見送りに来た母の恵子さんと敬礼でポーズを決めた。「緊張感を持って訓練に臨み、成長したい」という春香さんに「応援しています」と恵子さんがエールを送った。

出航式には石井国土交通大臣が臨席

し、「皆さんはこれからの日本を支える優秀な船員になっていける。我が国の海運を担うためには、常に誇りとやりがいをもって訓練に励み、さらなる研さんに努め、一回りも二回りも大きくなって帰港されることを期待している」と訓示を述べ、激励した。

「日本丸」の奥知樹船長は、「これから我々が渡る海は、冬の厳しい荒れ狂う北太平洋である。司馬遼太郎は著書の中で、自然の中で訓練によって自己を作ることの意義を説いている。日本丸で太平洋を渡することは自己を確立するために最も適した場所の一つである。それぞれを気遣いながら、一つの家族としてこの航海を成就することを胸に、一意専心の気持ちでこの航海に臨む」と出航の挨拶を行った。

午後2時、「日本丸」が静かに離岸すると、クライマックスの登檣礼が始まった。裸足でマストに登る実習生。多数の立候補者の中から選挙によって選ばれたチアリーダーの号令で、一斉に「ごきげんよう!!」と帽子を掲げると、岸壁から大きな拍手がわき起こった。2017年元旦。「日本丸」はハワイを目前に新しい年を迎える。

(2016年12月10日、横浜港にて取材)

帆船「日本丸」が育む船員魂

国内最後の実習訓練

12月3日、東京港晴海ふ頭に〃太平

洋の白鳥〃帆船「日本丸」が羽を休めていた。この日から3日間、「日本丸」は東京湾において、遠洋航海に向けて最後の実習訓練を行う。実習生は全国5つの商船系高等専門学校（富山、鳥羽、広島、弓削、大島）の4年生111名。その中には機関科の実習生15名も含まれる。女子は12名。実習生は10月から乗船し、国内航路で訓練を続けてきた。この乗船実習の集大成が、ハワイへの遠洋航海である。

「日本丸」は、3日午前10時30分、東京港を出港。奥知樹船長、山本訓史機関長をはじめ同船の乗組員は58名。実習を統括する専任教官（甲板部・機関部各1名）や看護長も乗船し、万全の体制で訓練に臨む。

午前10時に出港準備が発令され、船橋に上ると実習生が作業状況を船長に報告し、航海計器の確認作業を行っていた。水先人が乗船し、2隻のタグボ

ートに曳航されて「日本丸」が離岸した。レインボーブリッジをくぐり東京湾の中ノ瀬へ。午後1時投錨。5日午前までここで仮泊する。

1時30分、登橋訓練を実施。実習生は10月に乗船以来、各寄港地でセイルドリルを行い、数回の帆走も経験しているが、遠洋航海では航海2日目から約1カ月間は冬の太平洋を帆走で渡らなければならぬ。訓練をかねて、ヤードにセイルを結びつけるロバンド（三つ編みのロープ）の締め直し作業を行った。

ズボンをまくり上げて裸足になり、ポケットの中に落下物（文房具、時計、鍵など）が入っていないかを確認。登橋の際は身体の3点を必ず保持する3点支持が鉄則だ。ヤードに渡る時は互いに声をかけあう。命を守るために必要なことを一つ一つ体に叩き込んでいく。

自然に向き合う姿勢を養う

帆船教育の意義について奥知樹船長は、「過酷な自然の中を船で渡ってい

くことで協調性、責任感、積極性が備わってくる」と語る。さらに「船舶実習により即戦力を養成する方法もあるが、船が大きくなればなるほど、自然と対峙しているという感覚が薄れてくる。船のハード面での安全性は高まっているが、海を渡って人や

物を運ぶことは変わらない。自然と向き合う姿勢、身のこなしなどが養えるところに帆船教育の意義があると思います」と続けた。

厳しい自然と向き合う。それだけに「遠洋航海の目標は全員無事に帰ってくることに尽きます」と奥船長。そのうえで、「何のために航海するのか」を体得してほしいという。例えば高いマストに登るのは帆を張るためで、物事には必ず目的がある。目的に向かって努力できる人になってほしいと奥船長は願う。

中ノ瀬での実習2日目を迎えた。午前6時30分、総員起こし。実習生、乗組員全員が後部甲板に集合。雲

練習船恒例のヤシ摺り。早朝の甲板に実習生の声が響く

の切れ間から朝日が昇る中で体操を行う。その後航海科の実習生による練習船恒例のヤシ摺りが始まる。海水がまかれたデッキを「わっしょい、わっしょい」のかけ声とともに、ヤシの実を半割にしたタワシで磨くのだ。記者も



挑戦したが、素足に海水は冷たく、膝や腰に負担がかかる。

航海科は班ごとに、救命艇での救命設備取扱実習と、船橋で入港先の港務手続きについて学ぶ港務手続実習、教室で天気予報演習を行った。

天気予報演習の講師は、「日本丸」の小澤春樹通信長だ。現在ほとんどの民間船舶では航海士が通信士を兼務するが、その際、船舶局無線従事者証明書の取得が必要となる。小澤通信長は、船舶通信の基礎から気象予報まで実習生に指導するほか、無線業務、設備機器の保守、パソコンのシステム管理などを行う。練習船では航行中に限り毎



「日本丸」

日1回、モールス信号で位置情報を送信している。

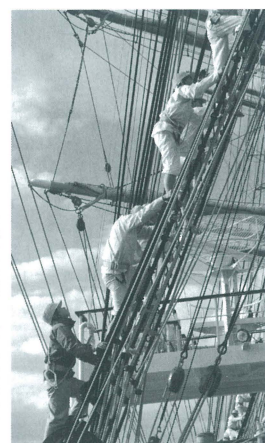
「モールス信号を聞き取れる人は少なくなりました。信号をすべて覚える必要はないが、通信手段として理解することは意義があります」と小澤通信長は語る。この日も午後8時、位置情報や行動予定を佐久間利彦2等通信士が打電した。

一方機関科の実習生は、座学中心の実習を行った。今回は5校から各3名ずつ15名の実習生が乗船している。

訓練から得た成果が力に

山本訓史機関長は「君たちは選ばれた15名だと、はっぱをかけています」と語る。「本船は1500馬力の2基の機関を搭載しており、小人数で実機にふれる機会が多く充実した実習が受けられる。自分たちで機械を動かせるまで習熟して学校に戻り、機関科の学生たちを牽引してほしい」と語る。

「学生には本船の機関を丸覚えするのではなく、なぜそうなっているのかを考えながら覚えるように指導します」と山本機関長。その結果応用力が身につく、トラブルの際に優先順位を正確



マストに登る実習生を最後尾から次席3等航海士が見守る

に把握できるからだ。

「つらい訓練から得た成果は必ず力になる」。山本機関長は、学生たちが海事産業を担う人材になることを願っている。

機関科実習生の奈須康起さん（大島）は、「遠洋航海に行きたい」と帆船実習を希望した。「機関科実習生が少ないので1対1で教えてもらえます。五感を使って見回しする大切さを実感しています」と奈須さん。あこがれは同船の3等機関士。「学生時代たくさん勉強し、その知識や技術を分かりやすく砕いて教えてくれます」と語る。

課外活動の学友会では航海科の学生とも交流を図る。コーヒー好きで料理班に所属。「船では下の者がコーヒーをいれると聞き、美味しいコーヒーをいれられるようになりたい」と笑った。航海科実習生の高濱翔さん（広島）

は、「乗船した頃に比べ、今は操船の楽しさを感じられるようになりました。特にマストに登った時の景色が素晴らしい」と目を輝かせる。辛いのは船酔い。「でも、こんな環境下で大海原を渡ることで、必ず自分自身成長できると思います」と遠洋航海に期待を寄せ

る。同船の1等航海士にあこがれる。

「姿勢もまっすぐで、話も上手。相手のことを思っ

五感を使って。機関の音に耳をすます



います」と語った。

実習3日目。朝の日課の後は、出航準備にかかる。エンジンルームでは7時半から暖機を始めていた。実習生も機関制御室、機関室とそれぞれ持ち場に分かれて作業にかかる。耳で聞き、目で見て、匂いを嗅ぎ、触って機械が正常に作動しているか確かめる。機関制御室ではその様子をモニターで確認しながら、船橋からの指示を待つ。

午前10時、横浜港が見えてきた。水先人は元「海王丸」船長の雨宮伊作さんだった。奥船長との息もぴったり。10時30分、帆船を知りつくした雨宮さんに導かれ、「日本丸」は静かに着岸した。

海は国や人をつなぐもの

厳しい北太平洋を渡った先のハワイ・カウアイ島では「日本丸」とゆかりの深い日系人が実習生の到着を待っている。現地での国際交流も実習生には大きな糧となる。

「海は国や人を隔てるものではなく、つなぐもの」。奥船長の言葉が心に響いた。

《実習生のひとこと》

日本丸で出会った実習生に、遠洋航海にかける意気込みを一言ずつ語ってもらった。



高嶋真太郎さん(鳥羽)

船員の魅力は、資格が取れることや給料が高く、休暇が長いこと。今は正直不安でいっぱいだけど、過去の実習生に負けずに頑張る。



間所森さん(広島)

進学するとき、父がこの学校を教えてくれた。船酔いに負けないよう、安全を心がけて、無事に帰ることが目標。



田島かい里さん(富山)

母は心配しているけど応援してくれている。遠洋航海では頑張っついていく。みんなまで無事に帰ってきたい。



宇都宮直人さん(弓削)

兄も弓削商船高専を卒業して、商船三井の船員になった。船酔いしても遠洋航海をやり遂げたい。



木村謙太さん(鳥羽)

双子の弟も同じ鳥羽商船高専の機関科。現在「銀河丸」に乗船している。遠洋航海で成長した姿を父に見せたい。



真船大地さん(鳥羽)

釣りが好きで学生会(課外活動)では漁撈班に所属。太平洋でカジキを釣りたい。遠洋航海で少しでも成長したい。



小西秀佳さん(富山)

中学の時、学校紹介で先輩が来校し、カッコいいと思って入学した。船員は素敵な仕事。遠洋航海では、何か一つでも自信をつけたい。



川尻彩夏さん(富山)

自宅から学校まで徒歩5分。中学からヨット部だったこともあり入学した。実習が辛くて泣いたこともあるが、泣かずに頑張りたい。

～伝統ある「練習船の味」を再現～ JMETS練習船カレーができました

海技教育機構(JMETS)が監修した「JMETS練習船カレー」(レトルト食品)が完成し、株式会社ヤチヨより販売中。販売価格は500円(税別)で、神奈川県内の物産店や海事関係施設などで販売される。カレーの購入方法は、店頭販売のほか電話・ネットでも。



練習船カレー

【問合せ】

電話＝ヤチヨ 046-828-7511

ネット＝かながわ屋 (<http://kanagawaya.com>)

ヤチヨ (<http://www.47club.jp/16M-000026poe/>)